

2024年4月19日（金）

老球の細道 791

プラハを訪れたのは「どこのドイツだ」⑩

・・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅱ〉・・・・
会津バスケットボール協会 室井 富仁

【2009年 12月29日】PARTIV

いよいよ楽しみのプラハ観光である。海外でも国内でも同じであるが、その土地のすばらしい名所旧跡、そして名物料理と地ビールは必ず堪能するようにしている。せっかくバスケットボールに携わり、日本国内はもとより世界各国を旅するチャンスに恵まれるようになったのだからどん欲に求めている。「求めよ、さらば与えられん！」

プラハと言ったら何はなくとも「プラハ城」。プラハ城はモルダウ川の西岸、フラツチャニの丘の上からプラハの市街を見下ろす歴代王の居城である。名実共にプラハのシンボルであり、どこからでもプラハの街の眺めを堪能できる。お城と言っても鶴ヶ城のように天守閣があるわけではなく、城壁に囲まれた広大な敷地の中に、旧王宮、大聖堂、修道院などが建っている。プラハ城の正門には衛兵が銃を持って立っていた。微動だにもせず無表情で直立スタビライゼーション。話しかけても無視。笑わせようとしても無表情。一緒に記念撮影してもウンともスンともない。まさに徹底。

正門前に石畳の広場があった。その広場は作曲家モーツァルトとサリエリの確執を描いたアカデミー賞映画『アマデウス』のロケ地になったところだ。今やヨーロッパの中世映画のロケ地は、ウィーンでもパリでもなくプラハしかないとのこと。城の中に入ると最高のスポット聖ウイード大聖堂はそびえる。圧巻だった。プラハ城の中で最も大きなゴシック建築で、正面には82メートルの二本の塔がそびえ、中ほどにはさらに高い99メートルの鐘楼が建っている。1300年代に建築が着工され1920年に完成。実に600年以上かけてじっくり造られた石造ゴシック建築である。気の長い話だが、それがチェコ流儀でありヨーロッパ文化なのだろう。

もう一つの観光スポット「カレル橋」はモルダウ川にかかるプラハ最古の石橋である。14世紀後半から15世紀初めにかけて、カレル4世の時代にゴシック様式を用いて建築された。全長520メートル、幅は10メートル近くもあり、両側の欄干に並ぶ30体の聖人像が目を引き。橋の上に彫刻をおくというのは大きな意味があるそうだ。元来、ローマで広場とは「彫刻で囲まれた空間」をいう。そういう意味でカレル橋の彫刻群は橋の上に広場をつくったのである。所狭しと立ち並ぶ露店、画家が似顔絵を描き、楽器奏者が音楽を奏で、そこを世界中の観光客が行き交う。まさに橋の上は広場に様変わり。識者によると、橋の歴史、規模、風格、彫刻などからしてプラハのカレル橋は「世界一」の広場橋だそうだ。また一つ世界一に触れることができた。氷点下の夕方、この橋から眺めたライトアップされたプラハ城は絶景だった。「プラハ城 おおプラハ城 プラハ城！」。

「我ことにおいて後悔せず」は宮本武蔵の有名な言葉である。私は後悔ばかりが続くが、今回チェコのビールを飲めなかったこともその一つである。チェコビールは紀元前3世紀に造られ、70あまりのビールメーカーがあり、一人あたりの消費量は世界一である。そのくらい美味しい「世界一」のビールを飲まないで終わってしまった。ただ単に時間がなかったからなのだが、「時はビールなり！」。

〈続く〉